



ミラン・トゥーツォヴィッチ、サーシャ・マリアノヴィッチ、ミリツァ・ニコリッチ、ミレナ・ミロサヴリエヴィッチ、ドラガン・バーボヴィッチ、マリヤーナ・アンジェリッチ、ミレンコ・ステヴァノヴィッチによる展覧会である。まるで黒澤明

の《七人の侍》のようでカッコイイ。各個人を論じるよりも、ここではこの展覧会から見えた、セルビア人による作品の特徴を引き出したい。アーティストはいずれも、日本画、油画、鉛筆、写真、パフォーマンス、ミクストメディアなど、技法は自由である。抽象化された作品もあるが、どの作品も具体的な事項に対して目を凝らし、観察し、咀嚼して、自らの解釈を打ち立てている。それは非常に時間がかかることであろう。そう、セルビアのアーティストは、着実に作品を創ることが特徴であるといえることができるのかも知れない。この着実さによって、作品の「色」というものが気にならなくなる。カラフルな作品が少ないように見えても、単色の作品の中で、様々な「色」が渦巻いている。創意工夫が為されていることは当たり前であろうが、日本を含むアジア、アメリカ、ロシアを含むヨーロッパの他国の中でも中々見られない共通項であると感じる。上記諸国の現代美術の作品群は、異常に早いか遅いかに振り分けられる。しかもそれは制作「方法」であり、観察を含め

る制作全体にかかる時間とは少し違うような気がする。かといって、セルビアの全てのアーティストに必ず共通する事項とは言い切れない。特化することは差別に繋がってしまう。実際にセルビアに行ってみたい。現代美術とは「先進国」が行うものではなく、何者にも束縛されていない人間の真の姿を示すことにある。国際展で見られるような最新の技術を用いた作品が現代美術であると限る必要性は全くない。素朴で根源的な技法の中にこそ、現代に苦しみながら生きる姿を確認できる場合がある。現代美術は作品を制作する欲求があるアーティストが勝手に生み出すのではなく、現代美術を必要とする受け手の存在もまた不可欠であることを、我々は忘れてはならない。

